



近江の塔 —その遺跡と遺物—

はじめに

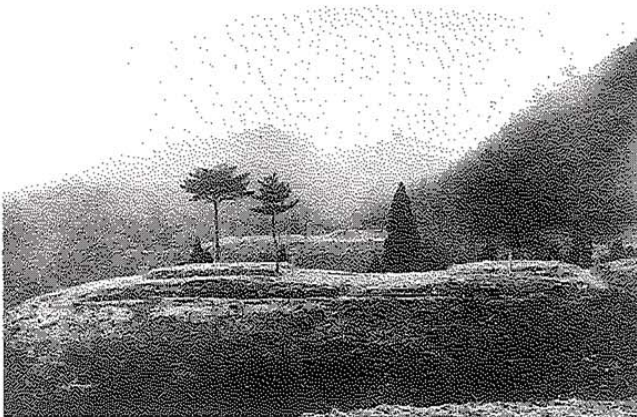
塔は、仏舎利（釈迦の遺骨）を奉安する施設として、寺院の伽藍中でも重要な建物で、その配置の中心に位置していました。本県にも塔はたくさんあって、いずれも、その寺院の重要施設として崇敬を集めていることは勿論ですが、すべて、価値あるものとして国や県の指定を受け文化財としても保護されています。また、石造の塔には、舎利を安置する以外にも種類の目的のものがあり、形も多種であることは、この文化財教室シリーズで既に述べられています。

ここでは、現に地上にある塔ではなく、考古学的な調査をされた遺跡としての塔跡と、塔の信仰を示す遺物としての瓦塔や土塔について、その大要を述べることにします。

崇福寺三重塔跡

ここは、南滋賀町廃寺とともに大津京関連遺跡として調査され、昭和14年に、塔心礎の舎利奉納孔に納められていた舎利および荘厳具一式が発掘されたことで有名です。

崇福寺遺跡地の一つである丸山の尾根には、しっかりした共通の基壇が造られ、その上に



崇福寺塔跡(左)と小金堂跡(右)
(滋賀県史蹟調査報告書より)

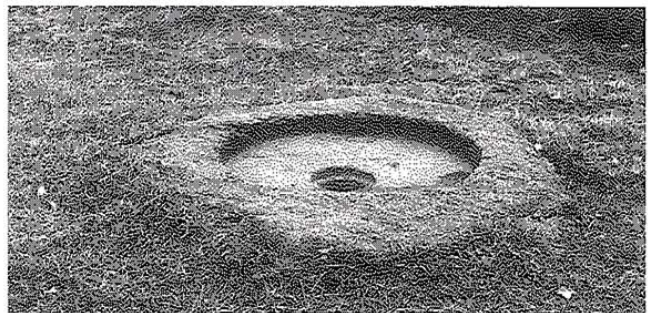
比較的簡単な基壇をもつ塔と小金堂がありました。塔は、ほとんど揃っていた礎石から、1辺6.25mの三重塔であったと考えられています。しかし、心礎は見つからず、持ち去られたものと思われていましたが、地表下1.2mの所から発見されました。しかも、その横に舎利奉納孔があり、銅・銀・金の3重の箱に入れた瑠璃壺に舎利が納められ、箱の内外には各種の玉類、銀銭、鈴や鏡などがありました。これらのものは、いま近江神宮の宝物であるとともに、国宝に指定されています。礎石が地下にあり、舎利容器が銅・銀・金の3重であることは、法隆寺をはじめ、この当時の舎利奉納法としてよく見られることです。

なお、この寺の伽藍配置は、南面して三重塔と小金堂が東西に並び、谷を距ててその北方に、金堂に当る弥勒堂があったようです。

南滋賀町廃寺塔跡

ここの塔跡は、大津市南志賀にある史跡公園の中に、中心に心礎を据えて周囲よりやや高く盛土した姿で残っています。この心礎は、近所の家に移っていたのを元の場所に戻したもので、盛土も、塔の位置と大きさを示すために整備したものです。

ここは、地下に瓦積基壇が残っていましたが、礎石は全然なかったので、塔の大きさは



南滋賀町廃寺・塔心礎

はっきりしません。しかし、基壇の大きさが方12m余りであり、心礎の大きさとも考え合わせて、1辺が約8mの三重塔と考えられています。心礎は、中央に舍利孔と蓋受けが穿たれていますが、舍利については不明です。

この寺院の伽藍配置は、南門や中門はわかりませんが、南面して塔と小金堂が東西に並び、その中央背後に金堂、更にその北に講堂があり、回廊と僧房がこれらの中心伽藍をとりまいていたようです。

雪野寺塔跡

竜王町にある雪野寺の塔跡は、かつて多くの塑像破片や風鐸が瓦とともに出土したことで有名です。塑像については、このシリーズ10で触れられています。

塔跡を調査した結果、地山に手を加えて基壇が造られ、その上に塔が建てられていたことが判明しました。基壇は、一部では2層になっていて、しっかりした石積みの下層基壇が発見されましたが、地山の固い部分ではこのような仕事はされていなかったようです。この下層基壇の1辺は約18mで、その上に1辺約13.8mの正方形の基壇が造られていました。礎石は一部残存していて、塔は1辺6.6mほどの大きさであることがわかりました。心礎はありませんでしたが、かつて、ここにあった巨石が付近の寺に運ばれて五重石塔の台石に利用されたという言い伝えがあることから、恐らくこれが心礎であったものと思わ



紫香楽宮跡の塔跡

れます。

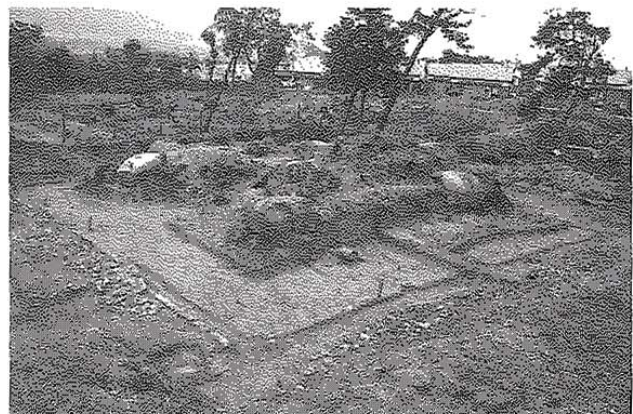
紫香楽宮跡

「紫香楽宮跡」として史跡に指定されている遺構は、現状では宮跡というよりも寺院跡と見るべきであろうと思います。これについては、宮が後に寺院になったものであるとか、宮跡は別に存在しここは最初から寺院であったとか、種種の意見があるようです。先年も、この遺跡の北方の宮町で太い柱根が発見されました。その発掘調査はされていないので断定はできませんが、宮跡については再考を要する点が多々あるようです。

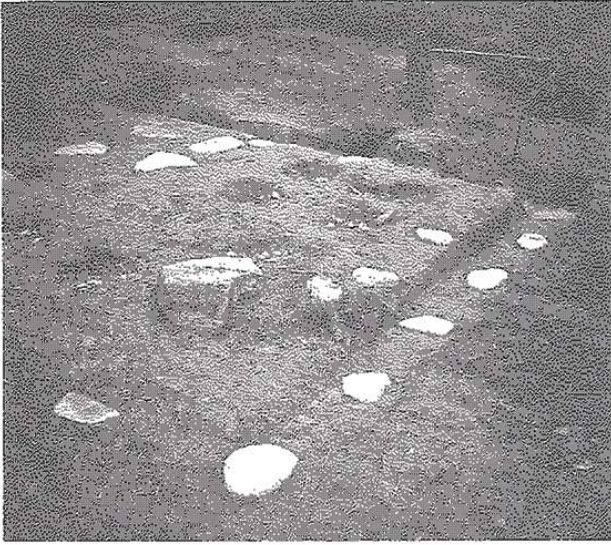
この遺跡は、出土した瓦から見ても奈良時代のものであり、当時の一般の伽藍配置から見て、東西両塔があってもよいのですが、塔は一つで、しかも、門があり回廊をめぐる塔院という一郭の中に造られています。塔院の中の一段高い土壇に礎石が据えてあり、方9m余の五重塔であったようです。昭和25年の調査に際して焼土層が発見され、礎石も火に遭っているもようで、この塔は火災で焼失したことがわかります。礎石は、すべて自然石で、外側の四隅のものが他より大きく、心礎は、割れていますが他の礎石より一段高く据えられています。舍利奉納の形跡は見当りません。

桑畑廃寺塔跡

最初の近江国分寺ではないかと推測されている瀬田・桑畑廃寺の塔跡は、名神高速道路の建設に当たって調査が行なわれました。その



桑畑廃寺塔跡の発掘状況



長寿寺塔跡の発掘状況

結果、基壇を瓦積みで整えた塔であることが判明しました。ここには、以前から5個の大きい礎石が正方形の四隅と中央とにあるだけで、その中間には何も見付かっていませんでした。したがって、中間の礎石は他に転用されたものと考えられていたのですが、調査の結果も、このような礎石を据えた痕跡は全然ありませんでした。この5個の礎石だけで造られた塔がどのようなものか、塔の常識に当てはまらないので、いろいろと推測はできますが、いずれにしても問題が残るようです。

塔の大きさは、隅礎石の間隔から推定して、1辺 6.3mの塔であったようです。ただ、前述したように、その間にあるのが当然と思われる2個の礎石も四天柱の礎石も最初から無かったようですから、この塔がどのような形であったかはわかっていません。

礎石はすべて火に遭っています。この点では国分寺が焼けたという文献と一致し、この寺院を国分寺とする一つの根拠となります。しかし、国分寺と決定するにはもっと多くの証拠が必要でしょう。基壇は、残っていた瓦積基壇の最下層からみて、方13mであったと考えられます。

この寺院の主要伽藍は、塔と金堂が南北に一直線に並んでいましたが、狭い地形のため、回廊や僧房の配置は特殊な状態であったよう

です。

長寿寺の塔跡

石部町東寺の長寿寺には、現在、塔はありません。ところが、本堂南の高所に6個の礎石があり、昭和31年に調査を行なった結果、これがこの寺の塔跡であることが判明しました。礎石の大部分は阿彌陀堂の礎石として移されていましたが、その礎石を据えてあったくぼみや根固めの石が残っており、さらに縁東石も検出されて、塔の規模が明らかになりました。一辺 3.9m程の三重塔で、周囲に縁が張り出され、背面（西）と北側面に階段があったようです。南側は、樹根があって調査不能のため、階段の有無については不明です。

また、塔の中央東寄りの地下から鎮壇具が出土しました。陶製の壺に和鏡で蓋をし、その上に石を置いたもので、中から朱を塗った自然石5個と糲穀とが発見されました。これは、塔を建立した際に地鎮のために埋めたものと思われます。

この塔は、僅かに出土した瓦と鎮壇具の鏡から、室町時代後期の建立と推測されますが、焼けた痕跡はありません。ところで、安土町の惣見寺の三重塔は、文献によると甲賀郡から移されたということであり、享徳3年（1454）の棟木銘があります。その大きさを長寿寺の廃塔と比較しますと、縁回りでは異なりますが、軸部では一致するようで、惣見寺三重塔は、長寿寺の塔が移されたものであるとも考えられています。



普光寺塔心礎

その他の塔跡

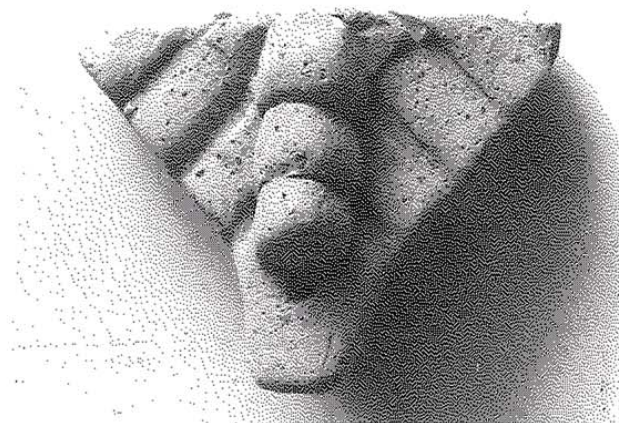
県内では、このほかに愛東町の百濟寺で塔跡の一部が調査されました。また、彦根市の普光寺跡には塔心礎が残っており、草津市の花摘寺跡には塔心礎に加工したと思われる手洗いがあります。そのほか数か寺で礎石の遺存が伝えられ、また、塔跡の所伝を持つ寺や廃寺もありますが、いずれも、それらの塔に関する詳細な点はわかっていません。

瓦塔と土塔

出土遺物の中で、塔の信仰と直接に結びつくものが瓦塔と土塔です。

瓦塔は、焼き物の塔の小型模型で、大津市の衣川廃寺跡から出土したものや、彦根市の普光寺跡出土と言い伝えられている遺物があります。衣川廃寺では、塔跡と推定される所から出土しましたが、最初この寺には塔はなく、この瓦塔を塔と同じ意味でお堂に納めてまつっていたとも推測されます。普光寺跡のものは、出土状況その他も不明ですが、後世のものと考えられます。

また、塔を建てることには大変な経済力を伴うことから、小塔を数多く作って造塔の信仰心を表わすことが行なわれました。この小塔には木製と土製とがあり、土製の小塔を土塔または泥塔と呼んでいます。「八萬四千泥塔」と記載された文献もあり、木造では百万基を作って各寺院に分置した記録もあります。また、寺院には、これらの小塔をまつるために、小塔院とか萬塔院とか言われる建物があったようです。



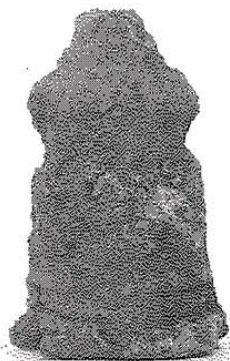
衣川廃寺出土瓦塔片

土塔の出土例は、県内では崇福寺跡、笛上の石居廃寺、近江八幡市の加茂廃寺の各寺跡で見られ、稲枝東小学校には付近で出土したと思われる土塔が保管されています。崇福寺跡では、すべて北の尾根のいわゆる弥勒堂跡からの出土で、総数 200基を超えています。その大きさはほとんど10cm前後で、形は数種に分類できそうです。石居廃寺跡のものは、崇福寺跡のものに比べ作りは精巧ですが、大きさは6cm内外のようです。これらの土塔は、相輪の部分に欠くものが多く、実際はもう少し高いものであったかも知れません。加茂廃寺のものも、現高4cm余りですが上部を欠いています。これらの遺物の存在は、県内の主な寺院では、このような小塔供養が行なわれていたことを物語っています。

これらの土塔は、両面から2枚の型を合わせて作られているようで、内部に空間があり、舍利に代わるものとして梵文などが入れられたものと思われます。（西田 弘氏提供）

土塔

▶ 崇福寺出土



▶ 加茂廃寺出土



▶ 稲枝東小学校保管

